

みずのき美術館 開館記念展

日本のアール・ブリュット について語ろう

私たちが考えるこれからの美術

2012年10月8日(月・祝) — 2013年3月17日(日)



休館日：月曜日・火曜日（但し、祝日の場合は開館）

開館時間：10：00 - 18：00

入館料：一般 = 400円 / 高大生 = 200円 / 中学生以下無料

主催：みずのき美術館・日本財団

監修：保坂健二郎（東京国立近代美術館主任研究員）

みずのき美術館



日本のアール・ブリュットについて語ろう

— 私たちが考えるこれからの美術

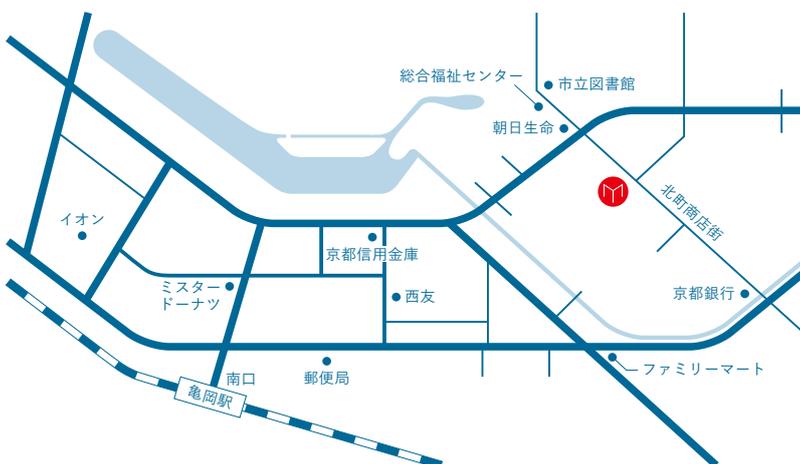
「アール・ブリュット」ってなに？ 「生(き)の美術」と訳してみたり、「正規の美術教育を受けていない作り手による、美術史的には判断しづらい作品」と定義してみたりすることはできます。でも、事はそう単純ではありません。たとえばみずのきの作品は、ローザンヌにあるアール・ブリュット専門の美術館に収蔵されていますが、パリで「アール・ブリュット・ジャポネ」展が開催された際には出品されませんでした。きっと、みずのきのように、プロの画家の「指導」がある場合には「ブリュット」ではなくなるということなのでしょう……でも、となると、それらをなんと呼べばよいのでしょうか。単なるアート？ それとも他の言葉を生み出すべき？ 今回の開館にあたり、そんな根源的な問題をちょっと考えてみてはどうかと思い、澤田真一さんなど「ジャポネ」展に出品された9作家約50点と、小笹逸男さん（1924年-2012年）などみずのきの13作家約20点を展示することにしました。

○ アール・ブリュットとは？

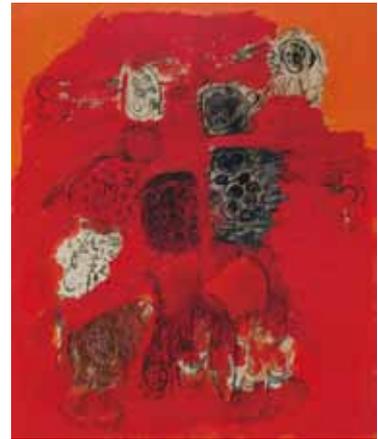
第2次世界大戦後、価値観の再編成が行われる中、フランスの芸術家ジャン・デュビュッフェによりつくられた言葉。日本語に訳される場合には、「生(き)の美術」「生(なま)の美術」とされることが多い。伝統的な美術教育を受けていない作り手によって制作されるそれらの作品は、美術史的な枠組みでは解釈し尽くすことができない。イギリスの美術史家ロジャー・カーディナルは「アウトサイダー・アート(outsider art)」と訳している。

○ みずのき美術館とは？

アール・ブリュットの作品を紹介することを基本に据えた美術館。商店街の一角に建っていた大正時代の小さな町屋が、建築家・乾久美子によって、先進的かつ開放的な空間として生まれ変わりました。かつて、いち早く、日本のみならず世界各国から注目された「みずのき」が、「新しいもの、古いもの、きれいなもの、少しかわったものが共存している」この空間で、アートと創造性について、多様な視点と方法で向き合います。なお、VIのデザインは菊地敦己によるものです。



1



2



3

1 岡本由加「タイトル不明」1997年／松花苑みずのき所蔵

2 山崎孝「無題」1998年／松花苑みずのき所蔵

3 澤田真一「無題」2006年～2007年／日本財団所蔵

表面 小笹逸男「遊ぶ猫」1982年／松花苑みずのき所蔵

みずのき美術館

〒621-0861 京都府亀岡市北町18

TEL 0771-20-1888 / FAX 0771-20-1889

www.mizunoki-museum.org

JR嵯峨野(山陰)線 亀岡駅 南口下車 徒歩8分

美術館に駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

※10月7日までは下記へお問い合わせください。

みずのき美術館 開設準備室

〒621-0007 京都府亀岡市河原林町河原尻下五丹12

松花苑みずのき内(担当:奥山)

TEL 0771-23-2101 / FAX 0771-25-4634

E-mail mizunoki-art@syokaen.jp